

子宮移植の申請検討 実施には慎重論

慶大、倫理委に年内にも

の倫理委員会に申請する
など意見を求める。

検討をしていることが9日、関係者への取材で分かった。生命維持のために心臓などの臓器を移植する手術とは異なり、子宮移植は出産が目的。国内で実施されれば初のケースになるが、提供者にかかる負担などを考慮し、慎重な意見もある。

計画は、生まれつき子宮がない「ロキタンスキ―症候群」の女性が対象。母親などの親族から子宮の提供を受け、3年間で5人程度での移植を目指す。

病気で子宮がない女性に第三者の子宮を移植する臨床研究を、慶応大のチームが今年中にも学内

たとしても、承認までには曲折が予想される。慶応大などのチームは2013年に、一度摘出した子宮を再移植したサ

ルが出産に成功したと発表。14年には「子宮提供者の自発的な意思決定や安全を確保する」などとした指針を策定するなどの、実施に向けた準備を進めていた。

子宮移植を巡り、海外では数は少ないもののサウジアラビア、トルコ、スウェーデンで行われ、

出産した例もある。日本では臓器移植法に基づく脳死移植の対象外。子宮がない女性が子を持つ方法としては代理出産もあるが、倫理的問題から国内の学会が認めていない。

チームは日本産科婦人科学会や日本移植学会にも計画を提出し、倫理面や安全面で問題がないか